

小・中学校特別支援教育研究部

I 研究主題

合理的配慮の視点に立った教科指導

II 主題設定の理由

今年度は児童生徒の実態に即した**合理的配慮**と国語科の指導について研究を深めてみたいと考え、この研究主題を設定することとした。

現在、特別支援教育では障害・能力を問わないすべての児童生徒を対象とするユニバーサルデザインや経験を生かして自立を目指すキャリア教育などにおいて、様々な配慮がなされている。そこで、今年度の研究主題を設定するにあたり、まず文部科学省が平成24年に示した「**合理的配慮**」について理解を深めることから始めた。この言葉がこれからの特別支援教育の研究をしていく上でキーワードになると捉えたからである。**合理的配慮**とは、障害のある児童生徒が日常生活の中で妨げとなるものを取り除くために、個々の様子や状況に応じて行われる配慮のことである。

児童生徒が将来、自立した生活を送ることができる「生きる力」の育成を常に念頭において指導をしている。特に、望ましい生活習慣やコミュニケーションなど社会性を身につけさせることは、通常学級や特別支援学級を問わず大事な要素であると考えている。今までも、特別支援の視点に立ったソーシャルスキルや社会性を身につけさせる教育プログラムなど様々な研究や実践がなされ、教育現場で広く取り入れられるようになってきた。「生きる力」を踏まえた主体的な学びのために、合理的配慮を取り入れた教育実践は、障害の有無にかかわらず、すべての児童生徒に対して求められるものだと考えられる。

特別支援教育の教科学習の場面における**合理的配慮**として、基礎的な環境整備があげられる。個々の児童生徒に応じた学びやすい環境づくりや分かりやすい教材の工夫、指導方法など、これらは、すべての児童生徒が学びやすく、集中して取り組むことができる環境を作るための配慮である。

平成24・25年度の特別支援教育の研究では、通級指導教室の担当教員と通常学級の担任が共同で、通常学級における今後の指導に生かしていく研究がなされた。24年度は、学級集団を育てることが、通常学級の中で支援が必要な子どもへの有効手段であり、その方法として、ソーシャルスキルトレーニングの研究が報告された。25年度では、学級全体に対する指導や授業形態、教室環境を整えるという支援や配慮が、特別な配慮を必要とする子どもへの支援にもなりうる結論付けた。今年度の研究員は、小学校特別支援学級担当教員が2名と中学校特別支援学級担当教員が1名、中学校通常学級担任1名の4名で構成され、小中の特別支援教育の情報交換がしやすい。そのメリットを生かし、日頃の授業において、特性や実態が違う児童生徒に内容を理解させるために、また、理解したことや感想を表現させるための合理的配慮についての指導法の研究をしていきたい。

さらに、本年度の基本テーマである「言語活動を充実させ主体的に学習に取り組む」ための研究として、国語科の指導に焦点を当て、特別支援学級での研究・実践を通して、すべての児童生徒の学習に生かせる支援を見出したいと考え、主題を設定した。

III 研究内容

1 合理的配慮についての理解

障害者の権利に関する条約「第二条 定義」においては、**合理的配慮**とは、「障害者が他の者と平等にすべての人権及び基本的自由を享有し、又は行使することを確保するための必要かつ適当な変更及び調整であって、特定の場合において必要とされるものであり、かつ、均衡を失した又は過度の負担を課さないものをいう。」と定義されている。この条約の定義に照らし、文部科学省の特別支援教育の在り方に関する特別委員会における**合理的配慮**とは、「障害のある子どもが、他の子どもと平等に『教育を受ける権利』を享有・行使することを確保するために、学校の設置者及び学校が必要かつ適当な変更・調整を行うことであり、障害のある子どもに対し、その状況に応じて、学校教育を受ける場合に個別に必要とされるもの」であり、「学校の設置者及び学校に対して、体制面、財政面において、均衡を失した又は過度の負担を課さないもの」、と定義されている（平成24年1月）。

これまでも実践してきているが、特別支援教育の考えに基づいて、通常学級でも生かせる合理的配慮という考え方の必要性が求められている。

合理的配慮の観点として、様々な視点からの配慮があるが、学習面での配慮について次の5つの視点を挙げていく。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">①学習に興味・関心・意欲が持てる②学習に見通しを持てる③学習で自分で考えたり、判断したりしたことを表現できる④学習で求められる基礎的・基本的事項が理解できる⑤学習で求められる技能を習得できる |
|---|

2 言語活動

特別支援学級では、通常学級より習熟度の差や理解度の差が大きく、すべて個別に指導している。国語科においても、読むためや書くための教材などもそれぞれ個別で使用している。

このような中で、言語活動について、音声や文字以外にも手話やアイコンタクトなど無言でも「意思の疎通ができる行動は言語活動になる」と考えた。個々の児童生徒が興味関心のある内容であれば、「主体的に学習に取り組む」と考えた。

また、国語の授業で、児童生徒の興味関心の高い教材とは、①体験したこと、②アニメなど好きなもの、③ビジュアル的なものである。これらを踏まえ、教科指導にこだわろうという方向性とした。

3 国語科指導における研究方法

(1) 書く指導

合理的配慮の定義と観点を基に、教科学習の「国語科」における具体的な支援方法として『書く指導』に焦点を絞って研究を進めた。

- ・ 「いつ」「どこで」「だれが」「何を」「どうした」「どんな気持ち」のイラストカー

ドや「文ちゃんカード」(主語・述語・修飾語を意識させる文づくりのための支援カード)を提示する。

→視覚的に捉えることで、語彙の範囲が広がる。

- ・ 写真を見ながら、作文を書く。

→写真を見ることにより、児童生徒は楽しかった思い出を甦らせ、表現したい場面や内容が広がる。

- ・ 友達の意見も頼りにして、表現したり真似したりする。

→写真を見て(視覚)も思い出せない児童生徒は真似ることで参考にでき、語彙やものの表現方法が広がる。



思い出に残った
写真



文ちゃんカード



個別
指導

(2) 授業実践の中で

言語活動を充実させるためには、意思を伝える方法としては音声や文字は欠くことができない。また、話し言葉はよく使えるのに、書き言葉は苦手とする児童生徒が多い傾向にある。

そこで、児童生徒が興味関心の高い題材の体験活動を国語科の中で計画的・継続的に行うことにより、「書く力」を高めていけるだろうと考えた。国語への関心・意欲・態度や話す力、書く力、言語についての知識・理解も同時に高めていきたい。自分なりの言葉でのつぶやき、その表現方法を支援することにより、楽しかった思い出を言葉で友達と共有できるであろう。前述したように言語表現について特別に支援が必要である児童生徒ではあるが、個別指導により、一つの文や文章、一枚の作文を完成させると達成感が得られるものとする。授業実践は、小学校と中学校で共通に「楽しかった思い出を書く」を行った(次項「実践例」を参照)。

IV 実践例

【学級 A 中学校特別支援学級】

1 題材名

「楽しかった思い出を作文に書こう」

2 題材目標（共通目標）

楽しかった思い出を振り返り、作文にまとめ、発表会をする。

3 指導計画

	主な学習活動	時間数
1	今までの行事や体験活動の写真を見て、どんな場面か、どんな気持ちだったかを発表し合う。また、どの行事が一番心に残り、作文に書きたいかを各自決定する。	1
2	それぞれが書く思い出に残った作文についての写真を収集する。	1
3	写真の場面についてどんな場面、状況だったかを簡単にメモし、カード化していく。	1
4	カード化したものを一つ一つ文に組み立て、ワークシートにまとめる。（本時）	3(1/3)
5	ワークシートにまとめたものを書く順番に整理する。	1
6	ワークシートを見ながら、原稿用紙に書き写す。	2
7	書きあげた作文を声に出して読み、修正を加えながら、発表に向けて読む練習をする。	1
8	発表会をし、感想を述べ合う。	1

4 本時の学習（共通目標）

思い出の写真を見て、文にまとめ、表現する。

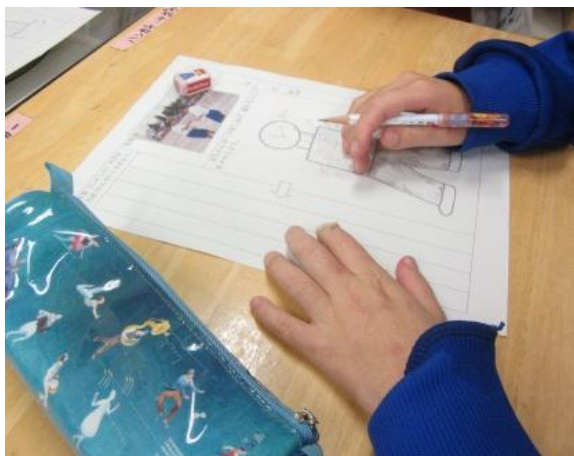
5 展開

配時	学習内容	指導上の支援・留意点	教材・教具
導入 3分 展開 42分	1 本時の課題を知る。 <input type="checkbox"/> 一斉		
	思い出の写真を見て、素敵な文にまとめよう。素敵な文をたくさん作ろう。		
	2 各自が選んだ写真を見て、一枚一枚を文にまとめていく。 発「これはどんな写真ですか。」 <input type="checkbox"/> 一斉	<ul style="list-style-type: none"> • できるだけ、生徒から言葉を引き出し、正しい表現法を指導する。 • 一人一人の生徒が選んだ写真の中の一枚を掲示していき、全員に発言を促す。 • 友達が題材として選んだ写真を見て、興味関心を喚起する。 	<ul style="list-style-type: none"> • 写真（黒板掲示用の写真） • 文ちゃんカード（黒板掲示用）
<input type="checkbox"/> 評価 課題に興味関心が持てたか。（関心・意欲・態度）			
	発「誰が、何をしているところですか？」 <input type="checkbox"/> 個別 発「どんな気持ちだったかな？」 <input type="checkbox"/> 個別 発「他に何が見えるかな」 <input type="checkbox"/> 個別	<ul style="list-style-type: none"> • 文ちゃんカードに一つ一つ記入していき、完成したら、一文に清書する。 • 文ちゃんカードを使用し、その中に、「いつ、誰が何をどうした」か、どんな音が聞こえたか、何が見えたかななどを付 	<ul style="list-style-type: none"> • ワークシート

ま と め 5 分	発「どんな音が聞こえたかな？」 個別	け加えていく。 ・表現法がわからない時には支援する。 ・写真一枚に付き、一枚のワークシートを仕上げる。	・個人のワークシートに貼る写真
	評価 教師の言葉がけを聴き、適切な文を書くことができたか。(書く) 語彙の範囲を広げることができたか。(言語)		
	3 仕上げた文を読む練習をする。 個別		
	評価 自分が書きあげた作文を読むことにより、思い出の場面を再確認し、理解することができたか。(読む)		
	4 仕上げた文の発表をする。 一斉	・一人一人の良かったところを称賛していく。 ・自分が頑張ったところや友達の良かったところを発表する。	
評価 友達の作文を聞いてよかったところや自分自身についての振り返りを発表することができたか。(話す・聞く)			
5 本時の振り返りをし、発表する。 一斉			

6 評価 (共通評価)

思い出の写真を見て、文にまとめ、表現できたか。



【学級 B 小学校特別支援学級】

1 題材名

「楽しかった思い出を日記に書こう」

2 題材目標（共通目標）

楽しかった思い出を振り返り、日記にまとめ、発表をする。

3 指導計画

	主な学習活動	時間数
1	今までの行事や体験活動の写真を見て、どんな場面か、どんな気持ちだったかを発表する。	1
2	それぞれが書く思い出に残った日記についての写真を収集する。	1
3	写真の場面について、事前にどんな場面だったか、その時の気持ちを発表する。	2 (本時 1/2)
4	文ちゃんカードを用いて、日記の文を作成する。	1
5	書きあげた文を発表する。	1

4 本時の学習（共通目標）

思い出の写真を見て、文にまとめ、発表しよう。

5 展開

配時	学習内容	指導上の支援・留意点◎評価	教材・教具
導入 5分	1 発音練習をする。 2 本時の課題を知る。 思い出の写真を見て、日記を書いて発表しよう。	・はきはきと口を大きく動かして発音するよう指導する。	
展開 35分	3 それぞれが選んだ写真を見て、一人一文ずつ文章を作っていく。 発「これは、どんな写真ですか。」 誰が、何をしているところですか。」 補「どんな気持ちでしたか。」 「他に何をしましたか。」 「どんな様子でしたか。」	・できるだけ児童から言葉を引き出し、正しい表現法を指導する。 ・一人一人の児童が選んだ写真の中の一枚を提示していき、全員に発言を促す。 ・友だちが題材として選んだ写真を見て、興味関心を持たせる。 ◎課題に興味関心を持つことができたか。(興味関心・態度) ・文ちゃんカードに一つ一つ記入していき、完成したら一文に清書し、板書する。 ・文ちゃんカードを使用し、その中に「だれが」「なにを」「どうした」か、児童から聞き出して書き入れる。 ・表現が分からないときは、教師が支援	・写真の提示 ・文ちゃんカード(黒板掲示用) ・板書

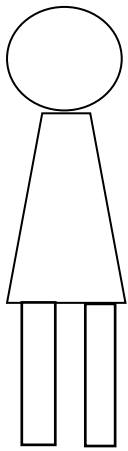
	4 仕上げた文を読む練習をする。	をする。 ◎教師の言葉がけを聞き、適切な文を三 文以上書くことができたか。(書く) ◎語彙の範囲を広げることができたか。 (言語) ・日記を書き終わったら、友だちの前で 発表する練習をさせる。 ◎自分が書きあげた日記を読むこと により、思い出の場面を再確認するこ とができたか。(読む)	・ワークシート ・気持ちカード
ま と め 5 分	5 発表をする。	・自分の日記を堂々と読むことができ るよう支援をする。 ・一人一人の良かったところを伝える。 ◎友だちの日記を、関心を持って聞くこ とができたか。(話す・聞く)	

6 評価 (共通評価)

思い出の写真を見て、文にまとめ、表現できたか。

7 板書計画

発音練習表	めあて おもい出のしやしんを見て、 日記をかいではっぴよう しよう。	よてい 1 はっおんれんしゅう 2 につきをかく 3 フリータイム	<input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/>
-------	---	--	--

<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	11 月 28 日 金 よう 日		文ちゃんカード
--------------------------	--------------------------	--------------------------	--------------------------	------------------------------------	---	---------

V まとめと課題

本研究は、「言語活動を充実させ主体的に学習に取り組む」ため、特別支援学級における国語科の学習に焦点を当てて研究を行った。特に、作文指導の授業づくりの中でどのような合理的配慮が有効であるかを明らかにした。

以下は、本研究を通じてとりわけ成果のあがった具体策について述べる。

国語科の指導内容は「聞く・話す・読む・書く・言語指導」であるが、特別支援学級では児童生徒の実態に即した教育計画を立て、授業を組み立てる。各学年の教科書を参考に、日常生活の中でよく使われる場面や体験など児童生徒が興味関心の持てる題材として取り上げて計画を立てる。授業を進めていく中で、指導が難しい分野は「書く」領域であった。それは、児童生徒に、

- ① 物の名称、気持ちや動作の表現法を知らない。
- ② 使える語彙の範囲が限られる。
- ③ 助詞の使いわけが苦手である。
- ④ 発表したい場面が思い出せない。

という実態があったからである。作文を書くためのオリエンテーションの授業を行い、出来事や心に残っていることを発表した後で、「さあ、書いてみよう」といざ書かせてみると書けないでいる。そこで、生徒が興味関心の高い題材の一つと思われる体験活動を取り上げ、見ることによって思い出せる写真を使った作文指導を計画的・継続的に行ってきた。

①学習に興味関心・意欲が持てる

授業実践では視覚に訴える教材（写真）を使用して作文指導を行った。児童生徒にとっては以前の出来事を思い出すよりも、写真を活用することで、視覚から得られる情報から記憶が鮮明に蘇り、言葉や文章を思い出すのが容易になっている。視覚刺激によって児童生徒の発言が増え、教員がそのひらめきやつぶやきを支援し、その言葉を手掛かりに語彙や文章をふくらませていく授業展開を行い、



児童生徒は「作文の楽しさ」を見出し、高い集中力が見られた。この指導を継続していく中で、「今日も、作文ですね?」「やったあ!」「今日は〇〇したことを書きます。」という声が聞こえ、作文を書くことへの意欲を感じることができた。

②学習に見通しが持てる

障害をもつ児童生徒への指導は、始点と終点を明確にすることが重要である。



毎時間の授業のはじめに、学習のめあてと流れを板書することにより、児童生徒は学習への見通しを持つことができた。「今日は、ここまでやればいいんだ。」「今日は、これを頑張ればいいんだ。」という意欲につながり、学習に安心して臨むことができた。

③学習で自分で考えたり、判断したりしたことを表現できる

思い出の写真を見て、書きたい写真を選びワークシートに貼り付けていく作業の中で、児童生徒の生き生きとした表情が見られ「この時、こうだったね。」「〇〇くんが～をしたよね。」「また、行きたいなあ。」など、数々の単語やつぶやきが聞こえた。それを教師との会話のやり取りの中で、文ちゃんカードを使用して文に作り上げ、見たもの、聞こえてきた音、感じたことなどをまとめていくと二、三文が完成した。それは児童生徒の喜びであると同時に教師の喜びにもなった。それを原稿用紙にまとめ、できた文を発表し合うという学習を継続して行ってきた。それぞれの作文の中で使われた漢字や言い回し等の言語表現に対して個別に指導を行うと、漢字も習得しやすくなる。また、文ちゃんカードの使用で主語と述語が明確になり、文法事項も指導することができた。



それは児童生徒の喜びであると同時に教師の喜びにもなった。それを原稿用紙にまとめ、できた文を発表し合うという学習を継続して行ってきた。それぞれの作文の中で使われた漢字や言い回し等の言語表現に対して個別に指導を行うと、漢字も習得しやすくなる。また、文ちゃんカードの使用で主語と述語が明確になり、文法事項も指導することができた。

以上のことから、視覚に訴える教材（写真・文ちゃんカード）の活用は、思考や発言を促すことができ有効である。

④学習で求められる基礎的・基本的事項が理解できる

特別支援学級には毎日1時間、生活単元時間が設定され、1日の振り返り（日記）をまとめている。毎日、写真を使わないが、教師と児童生徒、児童生徒間のコミュニケーションの中で、学習した内容や心に刻まれたことや楽しかったことなどを出し合い、教師がそれをキーワードとして取り上げ板書をする。こうした会話における合理的配慮を日々繰り返していくことにより、二、三文は書けるようになってきた。

児童生徒の中には、視覚優位と聴覚優位な児童生徒がいる。視覚優位な児童生徒にとって

は、写真のような視覚情報が多いのは望ましいが、聴覚優位の児童生徒にとっては情報収集の中で困難をきたすこともあるので、どのような板書計画が必要なのか考えなければならない。また、両者に共通した合理的配慮や支援として、授業中での指示や言葉は必要最小限にする必要がある。また、児童生徒の対話の中で、つぶやきを拾いあげ、簡潔な言葉で返事をするという合理的配慮も大切にしていきたい。

⑤学習で求められる技能を習得できる

文を組み立てるにあたり、文ちゃんカードを繰り返し使う中で、児童生徒は主語・述語を意識することができた。さらに、日常会話の中でも、文ちゃんカードをイメージしながら、話すことができるようになった。作文指導の成果が、日常生活の中にも生かせるようになってきている。

今回は、写真と文ちゃんカードを見て、文を作ることに重点をおいた。一枚の文ちゃんカードの中で、主語を一つ決めてしまうと、なかなか他の文を考えることが難しくなってしまう傾向がある。一枚の文ちゃんカードの中で、主語を変えてみるという工夫をすることにより、新たな文を作ることができ、一枚の写真から豊かな文章へとつなげることができるので、指導法をさらに工夫したい。



また、上記のように一枚の写真から、一人一人が読み取れることは様々である。これを30～40人という通常学級の学習では、児童生徒から見えるもの、感じるものを引き出すことにより、より多くの文ができる。すなわち、一枚の写真を切り口にして、児童生徒は作文を書くヒントを得ることができる。こうした気づきを増やすことが、言語活動の充実につながっていく。

以上、特別支援学級における国語科の指導において、成果のあった合理的配慮について述べた。特別支援教育の考えに基づき、通常学級にも生かせる合理的配慮の具体策をさらに研究していく必要がある。合理的配慮の視点に立った学習環境を整えることで、言語活動を充実させ、延いては児童生徒一人一人に確かな学力を身に付けられるよう、今後も実践研究を重ねていく。